開催地名：愛媛県今治市	
開催日時	令和２年 10 月 19 日（月）　13：45 ～ 15：20
開催場所	今治市立日高小学校　体育館
語り部	菅野　祥一郎　　（岩手県陸前高田市）
参加者	５年生児童 97 名、担任教諭等５名
開催経緯	今治市近郊では大きな災害が起こっていないため、児童の災害に対する危機意識が低くなっている。また、実感として災害の怖さを知らないことも、危機意識の低下につながっている。そのため、５年生の総合的な学習の時間を使って、「みんなで作ろう、防災のための安全な町」というテーマ学習を進めており、その学習の一環として語り部講演を実施することとする。
内容	（１）はじめに 東日本大震災から間もなく 10 年が経つ。以前はテレビや雑誌でも比較的大きく報道してくれたのだが、このように時間が経つにつれて報道されることも少なくなってきた。露出が減ると、もう自然と人々は、災害のことを忘れていくような雰囲気がある。しかも、東日本大震災発生後のここ 10 年以内ほどで、熊本や大阪、北海道での地震、全国各地での豪雨等、様々な災害が起こった。私は政治家でも研究者でもないので、東日本大震災のことを皆さんにどの程度詳しくお話しできるかわからないが、あの大震災が起こった時、大津波が押し寄せてきた小学校の校長として、あの日あの時、こんなことがあったのだという体験を話したい。 （２）津波被害の特徴 津波災害には３つの特徴がある。１つ目は一度に多くの命が奪われてしまうことである。信じられないかもしれないが、あの時の地震では、私の家では棚にあったもの何ひとつ落ちてこなかった。亡くなった方々は、全て津波で犠牲となられた。２つ目は、遺体が遠くに流されてしまうことだ。行方不明者が多いのはこのためだ。３つ目は、忘れられてしまうということだ。東日本大震災の前に三陸地方で被害を受けた「チリ地震津波」は、もう 50 年以上も前の出来事である。津波は、台風のように毎年やって来るわけではない。頻繁に来ないことはいいことだが、前回被害にあったときから間隔がかなりあいてしまうため、いつの間にかその怖さを忘れてしまうのである。 （３）絶対に子どもたちを助けるという信念 地震が発生したときに所用で校外にいた私は、急いで学校に戻ろうとしたが、途中の橋が通行止めになり、想定外の時間がかかってしまった。戻った時、子どもたちや近隣の住民は校庭に整列していたが、既に津波は川をさかのぼり始め

	ており、時間の猶予はなかった。私は、丸太の階段を使い、隣の山の上にある青いフェンスまで６年生から順番に登るように指示した。低学年から登れば渋滞してしまい、時間がかかってしまうからである。 　つい先ほどまで校門付近にいた数十人の人たちは、私たちのそばから消えてしまった。校舎に逃げた人たちは、屋上の貯水槽の上に登れた一人の方を除き、流されてしまった。子どもたちが助かった理由は、住民の生死を分けたものは何なのか。それは、「誰よりも早く逃げることを決断したこと」に尽きると思う。 （４）避難所では 　私たちの学校の子どもたちは全員が助かった。そして、何日か経つにつれて迎えに来る家族の人も増えた。いや、正確には迎えに来ても帰る家がないのだから無事を確かめに来た、と言った方がいいのかもしれない。食べ物は小さなおにぎり１個。近くの冷凍工場から流れ出た冷凍秋刀魚を拾い上げ、焼いて食べた。不平不満を言うものは一人もいなかった。 　ある子には最後まで誰も迎えに来ることはなかった。その子がどんな思いで家の人が来てくれるのを待っていたか、みなさん想像がつくだろうか。本当につらかったと思う。 （５）皆さんへのお願い 　皆さんに、以前教師だったという立場からお願いしたいことがある。それは「命を大事にしてください」ということである。まずは自分の命を、そして隣の人の命を。人生には思いもよらないことが起こる。だから、今、この時を大切にして、生きていることの幸せをかみしめてほしい。そして、誰の命も大切にする人になってもらいたい。
開催地より	実際に起こった災害についての話を体験者から直接聞くことで、子どもたちは何事にも代えがたい経験をすることができたと思う。防災の必要性にとどまらず、命の大切さを感じてくれたことと思う。本当にありがたい講演だった。